

雨が降ってきた。冷たい雨だった。

ついてないと思うよりも、むしろとうぜんだと思った。こんなことをしてしまったのだ。報いがあつてとうぜんだ。

スコップを握る手も、腕も、足腰さえもはや感覚はない。疲れなどというものは、とうに通り越して、全身が無感覚となっている。

それに鞭を振るうように、雨が振りつけるのである。痛みを思い出せ、苦しみを忘れるな、とばかりに――。

どうしてこんな事になったのだろうか。

依然としてスコップで穴を掘りながら、関川充夫は、頭の片隅で思った。

幸恵とは幸せにやっていた。愛していたし、愛されていた自信もある。それなのに、どうしてこんなことになったのだ……。

「いや、やっぱり康子が悪いんだ」

充夫は呻くようにつぶやいた。

確かに康子のことも、かつては愛していたのだ。けれどもいつしか、人の気持ちは変わる。

愛情の欠片もなくなったというのに、なぜ離婚してくれない。たった一度の人生ではないか。単なる意地でいっしょにいて、何が楽しい。充夫と別れず、充夫を不幸にしていることが、康子にとつては幸せだったというのか。

本来なら、ここに埋めるのは康子のほうだったはずである。それがどこで、何をまちがえて、こんなことになってしまったのか。

「いいの、わたしはこのままでも」

幸恵はそう言ってくれた。

「いや、それはだめだ。男としての責任がある。それにぼくは君といっしょになりたいんだ」

自分はそう言ったはずだ。それでも幸恵は悲しそうに首を横に振った。

「奥さんが別れてくれるわけがないもの」

その後、じつと充夫を見つめて、さらに言った。

「でもね。わたしも別れない。愛人のままでいいから、ずっといっしょにいて」

その顔は恐かった。ふだんの優しい幸恵とは別人のようだった。だから充夫は、そん

な彼女ではなくなってくれ、ことを祈るようになりかえした。

「康子とは別れる。きつと別れて、君といっしょになる」

本心だった。その流れから行けば、離婚を厭がる康子をこの穴に埋めているはずだ。それが、どこでまちがったのか。

雨は強くなるばかりだった。はやくも木々の合間を雨水が筋となつて流れてきている。一時間以上もかけて、やつとのこと遺体を埋める程度にまで掘った穴に、容赦なく泥水が流れ込んでくる。

「やめろ。邪魔をするな」

叫んだ声は、雨音にかき消された。

先ほどまでは声でも出そうものなら、深夜の山奥に木魂しただろ、今は声どころか、充夫の存在自体、かき消されそうだった。

照らしつける光がずれた。こちらに向けて置いた大型のライトが、濡れた土砂に流されそうになっている。直しに行く気にはなれなかった。それよりもはやく穴を掘り終えて、幸恵を埋めてやろう。

幸恵は死んだのだ。死んだ人間は、どんどん腐敗し、醜くなっていく。そんな幸恵の姿は見たくない。美しいままの存在として、記憶に残すために、一刻も早く埋めてしま

わなければならぬ。

「そうか。だからか」

充夫はつぶやいた。

「わたしがおばあちゃんになっても、棄てないでね」

ホテルで抱き合つた後、幸恵が言つた。

そのとたん、充夫は自分で自分が制御できなくなつた。四十になる充夫よりも、幸恵は十あまり年下だ。まだまだ若い。が、三十路を迎えたことが、彼女にはずいぶんと痛手だつたらしい。

もちろんそれだけではない。愛人という立場が、口ではそのままいいと言いつつながら、彼女を歳以上に老けさせようとしている。それを直感したためだ。

「いや、ぼくのせいじゃない。悪いのは、幸恵だ」

充夫が咄嗟に首を絞めても、幸恵は抵抗すらしなかつた。うつと喉を詰まらせた後は、むしろ積極的のけぞり、首をさしだした。

「どうしたの。好きにしていいいのよ」

充夫が指の力をゆるめると、そう言つたのも幸恵だつた。

だめだ、こんなことはできない。充夫は首から手を離そうとしたのだ。ところが幸恵

は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「ふん。意気地なし。結局、誰とも別れることなんてできない意気地なし」

瞬時に全身の汗が、ガソリンに取って代わり、火を放たれた。比喻ではなく、実際にそうなった気がした。訳がわからず、ただ悶え苦しむように、充夫は足掻いた。

その状態が、どれくらいつづいたのか、わからない。実際には一分そこそこだったの  
だろうが、充夫には永遠に消えない悪夢だった。

訳がわからないものの、心の中では子どものように泣いていた。恐いよお、助けてくれよお、恐いんだよお。

そうだ、一番悪いのは母親だ。

充夫をあんなに可愛がってくれたのに、十年余り前、勝手に死んでしまった。母は康子を毛嫌いしていた。そのせいもあって、康子はどんどん厭な女になってしまったのだ。

「母さんが悪いんだ。さんざんめちやくちやにしておいて、逃げるように死んだ、母さんが悪いんだ」

叫びながら、全身を振るわせたとき、ボキッと鈍い音がして、やっとのこと充夫は我に返った。あわてて両手を離れたものの、すでに幸恵は絶命していた。

「殺す気なんて、まったくなかったのに、母さんが悪いんだ。いや母さんだけじゃない。」

康子も、幸恵もみんなグルだ。ほんとうは裏でつるんでいて、よつてたかつて、ぼくを貶めようとしたんだ」

打ちつける雨が、涙と鼻水を流していった。拭おうとしたとき、足が滑って、前のめりになった。バランスを立て直そうとしたものの、辺り一帯はわずかなうちに泥濘となっていた。

回転に失敗したフィギュアースケート選手のようなかつこうで、充夫は尻から穴の中に落ちた。それを待っていたかのように、いつそうの土砂が流れ込んできた。同時に大きな異物が起き上がるようにした充夫の上に覆いかぶさる。

懐中電灯の明かりは、穴の中までは届かない。枯れ木が塊となって流れて込んだのか。すぐに違ふとわかった。

「充夫さん」

闇の中、すぐ近くから声がした。

「幸恵？」

「ええ。やっと二人きりになれるのね」

「で、でも、君はもう……」

「ううん、わたしだけじゃない。あなたもすぐに」

「い、い、いやだ。ぼくはまだ死にたくない」

「無理よ。もう。出られない」

「いや、ぼくは出る。出られるさ」

「それなら、わたしが出さない」

濁流に流された土砂が、どんどん穴の中に流れ込んでくる。

「企んだな。そうだろ。ぼくに殺させて、そして……」

「何となく」

幸恵が鼻で笑うのがわかった。

かっとなつた充夫は、無我夢中であがき、声を張り上げる。

「わかった。一番悪いのは、幸恵、おまえだ。おまえだったんだ。おまえさえいなければ、こんなことには……」

「ちがうわ」

雨が強まった。それ以上の凄まじい、雷のごとき声で幸恵が叫んだ。

「一番悪いのは、お前だ！」

言葉が落雷となつて、充夫を直撃した。

動きを止めた二人に、雨が降り、土砂が覆いかぶさっていく。(了)